

【図画工作科】教科提案

感じる かかわる 「伝え合って」つながる 楽しい図画工作 ～多様な素材体験を積み重ねて～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

図画工作科は、昨年度より〈感じる かかわる 「伝え合って」つながる 楽しい図画工作 ～多様な素材体験を積み重ねて～〉を教科提案として取り組んでいる。素材に継続的かつ多様なかわりをもつことが素材への認識力を高めることや、自然素材の心地よさが言語化を促すこと、対話による鑑賞で自分の感性をはたらかせることや、感じたこと想像したこと考えたことに自信をもち交流できるなどの成果があった。本来個人的な活動である表現や鑑賞を、グループや全体で交流したり、対話をしたり、協働で行なったりすることで、自分の表現に影響し、鑑賞の際の想像が深まることがある。昨年度は、表現活動の中間相互鑑賞をすることでより表現を広げ、鑑賞活動に「演じる」という表現活動を取り入れることでより鑑賞を深めるという、表現と鑑賞の一体化の形を提案した。

鑑賞で、作品について話し合うだけでなく、描かれた場面を演じる（ポージングと台詞）ことで、モチーフへの想像や、描いた主題などに迫っていけないのではないか。また、グループで台詞等を考える時には、多様な想像が話し合われることがあるだろう。自分とは違った想像を演じてみることで新たに気づく事もあり、自分の想像をふり返るきっかけになるだろうという仮説を立てた。

国語科などの学習では、脚本を書く中で題材への理解が深まることが多い。解釈を話し合い、台詞を考え、脚本を書くという一連の活動を通し、「絵を演じる」活動に取り組んだ。作品を演じる活動は、作品の登場人物の表情や姿勢、ポーズを真似ることから始めた。自身がその表情を浮かべ、そのポーズを実際にやってみることで、気付くこと、得るものは多かった。

図画工作科は、造形的な表現活動を通してつくりだす喜びを感じながら、思いや体験に、自分のイメージをもち、色・形を組み合わせることで表現し、情操を養うことを目的とする教科である。

本校の「問い続け学び続ける子どもたち」という提案は、図画工作科においては、素材や題材、表現手段である色・形への認識力の深まり、材料などに基づいた発想や構想の能力の高まりが、どのように自己の表現や鑑賞に生かされるようになるのかだと考えた。

色・形への認識力を高めるため、表現活動の際、「見せる」「見せ合う」活動を多く取り入れ、「見え方」を意識したり、友だちの色・形のとらえ方に触れたりさせる。また、鑑賞に演技などの表現を取り入れる。友だちとかかわりながら、自分の思いや表現を伝え合い、見せ合い、自分の見方を再認識したり、自分の見方や表現のよさに気づいたりして、形や色の認識を深め、ひろげ、新しい価値観を創造する活動によって色・形その構成など造形的な感覚を育てたい。

(2) 図画工作科がめざす子ども像

学習指導要領では図画工作科の目標を次のように定めている。

「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」

「感性を働かせながら」について、学習指導要領解説によると「感性」とは、「様々な対象や事象に心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性をはぐくむ重要なもの」であり、「これを手掛かりに児童は発想をしたり、技能を活用したりしながら、自他や社会と交流したり、主体的に表現したり、よさや美しさを感じ取ったりしている」とある。図画工作の表現手段である色・形を手がかりに、ものや体験を読み解こうとする（感じる）時、一人ひとりの感性の違いが感じ方や表現の思いの違いつながる。そのちがいを交流することや、友だちの表現から受ける「感じ」を、自分の感じ方や見方、考えとかかわらせたい。

造形的な表現活動の基礎的な能力を身につけさせ、生活や社会に主体的にかかわろうとする態度を育て、豊かな感情を育てるため、図画工作科でめざす子ども像を以下のように考える。

- 造形的な表現活動の基礎的な能力を身に付けた子
- 表現や鑑賞活動を通して、生活や社会、仲間に主体的にかかわろうとする子
- 自らつくり出す喜びを感じる子

2. 図画工作科における「問い続け、学び続ける子どもたち」

(1) 実践例より

鑑賞の授業について記す。

作品は、「鳥獣人物戯画 甲巻」の一部である。

「鳥獣戯画」は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて描かれ、京都の高山寺に伝えられ「鳥獣人物戯画」として集成したものとされている。「鳥獣人物戯画」は、全部で甲、乙、丙、丁の4巻あり、作者は、鳥羽僧正覚猷（かくゆう、1053～1140）と伝えられるが、他にも絵仏師定智、義清阿闍梨などの名前が指摘され、いずれも確証はなく、作者未詳である。日本最古の漫画と言われ、今回取り上げる甲巻にはウサギ、カエル等が相撲などをして遊ぶ様子が表情豊かに描かれている。

しかし、言葉による説明は書かれず、説明書きも残されていないため、作者がどんな願いを持って、どんな場面を描いたのかは多様な解釈が可能である。明確なストーリーはなく、擬人化された動物が人間の所作を軽妙に表している絵が続く。

鑑賞したのは、冒頭の水の場面である。



水の場面の演技発表では、水遊びだという解釈と、温泉という2通りの解釈があり、右下のウサギとサルは、ウサギの顔が笑っているから仲良く

遊んでいるという解釈と、サル表情が苦しそうだから泳ぎの得意なウサギが苦手なサルをからかっているという解釈があった。右上の倒れそうに水に飛び込みそうなウサギは、倒れそうだから背中から飛び込んでいるという解釈と、右手の位置が口の辺りに置かれているのを「今日はお安くなってますよう」と温泉への呼び込みだとする解釈があった。

ほかにも、サル輪郭を描く線が太くギザギザだから水に濡れているなどいくつかの表現の工夫への気づきがあった。

実際に動くことで、形や線の太さなどにより注目し、分かることや想像が深まったといえるだろう。

これらは、一旦それぞれが自分の解釈をワークシートに書き込み、グループでそれを交流し、さまざまな解釈で演技の練習を行い、グループのみんなが納得できたものを全体で発表している。

このようなさまざまな方法を組み合わせて、絵を読み解いていこうとする姿に、問い続け学び続ける子どもの姿が見える。

(2) 図画工作科におけるみとりと支援

表現活動では、制作の途中に3～4人の小グループあるいは全体で、表現したものをもとに話したり、見せ合ったりする場を保障し、子どもたちが互いに感じたことを交流し合い、自分の感性と友だちの感性を比べられるようにする。見せ合う活動を通して変容をみとっていくようにする。また、見せ方を工夫させる。

鑑賞活動では、多様な場面設定ができたり、演技などの動作化ができたりと、子どもたちが楽しくかかわることのできる作品を選び、自分が感じたことを小グループや全体での話し合ったことをもとにした演技やポージングでの発表やワークシートなどを活用し、自分の感性に自信が持てるように支援する。

3. 研究の展望

・感じる かかわる 「伝え合って」つながる

感じたこと、考えたこと、伝えたいことなどを表すとき、素材や題材、道具にいっぱいかかわることは素材などへの認識力を高め、道具の扱いに慣れることができる。

自分らしい表現を追求していくことは、「見え方」を予想し「見せ方」を工夫することと両輪である。そのためには相手にどのように見えているのかを知る必要がある。「どんな感じかな」と感じたことを図画工作科の表現手段である色と形を構成して表現するとき、友だちの表現を見たり、美術作品を鑑賞して、自分との感性のちがいや似ていることに気付いたり、相手にどう見えているのかを意識したりすることで、多様な見方が育ち、「色」「形」「その構成」への認識力が高まると考えた。

また、自分の見方に自信がなかったり、作品が思うようにできず「失敗だ」と思ったりしてい

ても、友だちがそのよさに気づき、伝えて合うことで、改めて自分の見方や作品のよさに気づき、友だちの感想を取り入れて、自分の見方に自信を持ったり、作品を改良しようとしたりすることがある。その体験が、色や形への認識力をさらに高め、新しい価値観を創造することにつながる。

そのため、鑑賞活動では「対話による鑑賞」を取り入れ、グループや全員で対話しながら美術作品を鑑賞する。

表現活動では、制作途中に「見せ合いタイム」を導入し、友だちのアイデアや工夫を知り、感想を交流し合う機会をもつ。また、「見せたい」「伝えたい」という思いが湧く題材に取り組む。

・多様な素材体験

図画工作科は、「表す」活動の過程で表現対象である経験を追体験したり、ものに主体的にかかわったりする活動によって対象や、表現手段である色・形、素材への認識力を高める。

人間の進化の過程には、手や道具を使っての自然素材への主体的な関わりが欠かせない。

しかし、生活環境の変化により、自然素材に関わる機会は少なくなった。そこで、基本的な自然素材である草木、土や石に紙などを加え、これらを手や道具を使って加工する多様な機会をもつことを大切に取り組む。その素材で何を制作するかを急ぐよりも、素材の感覚を手や体で感じさせたい。造形遊びの活動の中から仲間との対話が生まれ、自然に何かを制作しようという動きが出てくる。このような素材体験の機会を多く持つとともに、一つの素材にじっくり時間をかけて取り組む機会も持たせたい。

4. 研究の評価

・感じる かかわる 「伝え合って」つながる 楽しい図画工作

表現の中に鑑賞を取り入れたり、鑑賞を深める方法の一つとして演技などの表現を取り入れたりして、鑑賞と表現の一体化を進めていくことで、色や形の認識力が養われたか。

友だちと伝え合う活動をすることで、自分のよさに気づいたり、新しい価値観を創造したりすることができたか。

・多様な素材体験について

表現では、多様な素材や、同じ素材に多様なかかわり方をすること、鑑賞では多様な見方ができる作品などにかかわることで、感覚や情操を養うことにつながったか。